

大原社会問題研究所と 労働科学の誕生

中山 いづみ

はじめに

暉峻義等と労働科学研究の誕生

桐原葆見の事例

おわりに

はじめに

大原社会問題研究所は日本の主要な労働研究所の一つで、驚くほど多くの資料を所蔵し、かつ労働問題に精通した研究者が活動していることでよく知られています。繊維産業の有力な経営者（倉敷紡績）であった大原孫三郎により1919年に設立された同研究所は、戦前期は民間の社会科学研究所でした。戦後、法政大学の附置研究所となり、文書館と図書館機能をもつ研究センターとして機能するようになりました。

1996年4月、当時の大原社研の所長の二村一夫教授は、「21世紀の法政大学審議会」の「女性と大学」作業部会（女性学研究センター設置について審議した）で、「大原社会問題研究所と女性学研究」という発表を行いました。このなかで、二村教授は女性学研究センターの設置の検討は「大変意義がある」としながらも、「大原社会問題研究所が、図書資料の収集整理の面では、すでに女性学研究センターとなりうるだけの実質をもっている事実」が「あまり知られていない」ことを指摘しました。また、労働問題の研究所と一般的にみなされるものの、実は大原社研は戦前期においては日本における女性学研究の「草分け的存在」であったと述べました。二村教授は初代所長の高野岩三郎の重要性にも触れ、彼が科学的な家計調査を行ったことを挙げました。高野所長の「（婦人問題の解決には）『同一労働には男子と同じ報酬を、政治上には婦人参政権、教育上には男女機会均等を要求し、根強い堅塁を覆すより外にない』」という信念は、大原社研の「婦人問題」や女性労働の調査の基調となったとされています⁽¹⁾。

(1) 二村一夫「大原社会問題研究所と女性学研究」（96年4月5日に「女性と大学」作業部会で報告した原稿に加筆したもの）、二村一夫著作集<<http://oohara.mt.tama.hosei.ac.jp/nk/>>より。

大原社研には「森戸事件」で有名になった森戸辰男や、戦前の女性労働者の実態を調査した大林宗嗣などが研究員として在籍しました。また、初期には、後の労働科学研究所を設立することになる労働科学研究者のグループも在籍していました。

労働科学研究所（労研）は、大原社研の研究部門の一つとして出発し、大原社研から分離して独立した研究所となりました。労研は現在民間の財団法人の研究所以、受託調査研究や雑誌や文献の出版を行っています。本日の発表では、戦前の女性労働研究に貢献した労働科学研究者のグループ（このグループの存在は見落とされる傾向にある）について焦点をあてます。

暉峻義等と労働科学研究の誕生

労働科学が学問的分野として確立したのは、20世紀初頭です。労働科学を学問的に確立させ、また労働科学研究所の設立に重要な役割を果たしたのは、暉峻義等（てるおか・ぎとう、漢字が難しいため日本人の多くも名前を正しく読むことができない）ですが、彼は日本史研究の主流ではあまり知られていません。暉峻は兵庫県高砂で生まれ、父親は寺の住職でした。鹿児島県の第七高等学校卒業後、1910年に東京帝国大学医学部に入学しました。当時の東京帝国大学には、海外留学からの帰国者が多くを占める新しい教授陣が揃っていたため、暉峻は授業で日本の最先端研究に触れる機会をもちました。例えば、彼は日本の心理学の父と呼ばれている元良勇次郎の授業や、大澤謙二、永井潜、富士川游などの授業を受講しました。なお富士川游は、医学博士と文学博士の2つの博士号を取得したという20世紀初頭の日本で数少ない学者の一人です。東京帝国大学を卒業後、暉峻は大学院に進み、永井潜教授の指導のもと生理学研究室で研究を行いました。また、暉峻は新人会の会員でしたが、東京帝大医学部からは唯一の会員でした。

永井教授の研究室で研究を行うかたわら、暉峻は委託を受け浅草にあった労働者学校で講師を務めていました。この労働者学校は、有馬頼寧、近衛文麿、木戸幸一によって設立されました。暉峻は、浅草の学校に週2回通い、生理学と栄養学の講義を行いました。さまざまな若い華族や知識人もこの学校の運営に参加し、暉峻がこの学校で築いた政治的人脈は、その後の彼にとって役立つものとなりました。

1916年、暉峻は警視庁と内務省から調査を受託しましたが、テーマは彼が自由に選ぶことができました。彼は東京の貧民街である本所（現在の墨田区）の状況を調査することに決め、6カ月間そこで暮らしました。そして、研究成果を1927年に刊行された『社会衛生学：社会衛生学上に於ける主要問題の論究』のなかで発表しました。この研究は、本所における貧困の主要な原因を病気であると、高い乳児死亡率や皮膚病、呼吸器系の病気、目の病気が住民の間に蔓延していると指摘しました。

当時内務省の保健衛生調査会の委員であった高野岩三郎は、この研究に関心をもちました。高野は月島調査の準備にあたって、暉峻に本所の貧民街の案内を依頼しました。この契機に生まれた高野と暉峻の関係および大原孫三郎の遠い親戚にあたる永井潜の推薦により、暉峻は大原社研に「医学専門家」としての職を得ました。研究所が求めている医学専門家とは、医療行為を行う医者では

なく、医学的訓練を受けただけでなく医療、健康、生理学を社会問題の文脈のなかで研究することに関心がある研究者でした。社会衛生研究の分野では最先端を行く暉峻の東京の貧民街の研究は、医学と社会科学を融合したもので、大原社研にとっては非常に魅力のある研究でした。

1919年8月、暉峻の名前が初めて大原社研の会計簿に登場しています。暉峻の研究所の任務には、『社会衛生年鑑』の編集作業が含まれています。研究所の建物が大阪天王寺で新築されている間、暉峻は東京八王子を対象とした新たな調査を開始しました。1919年後半の八王子における乳児死亡率を分析したこの調査で、暉峻は母乳で育てることと乳児の死亡率の相関関係に注目しました。母乳と人工乳の混合で育てられた乳児の死亡率は、母乳のみで育てられた乳児より3倍も高かったのです。詳しい調査の結果、暉峻は賃労働に従事している女性が母乳をつくれず、人工乳に頼っていることを発見しました。彼は、工業部門の賃労働が女性からエネルギー、とくに乳児に母乳を与える力を奪い、その結果乳児死亡率を増加させているとの推論を示しました。暉峻はこの問題が生産・再生産の両局面における女性労働の問題であると論じ、この問題に対する労働研究者の関心の低さを嘆きました。しかし彼は、女性が家庭に戻ることを主張するのではなく、社会全体の向上のために労働条件の改善を求めました。この調査は、暉峻の生理学の素養と社会問題への関心が学問分野を超えたテーマと調査方法に結実したことを顕著に示しています。

大原社研での暉峻の仕事はどのようなものであったのでしょうか。労研の「言い伝え」によると、暉峻は大原孫三郎に、研究所の建物のなかには何もやることがないと苦情を述べ、工場の労働条件の調査の実施を希望しました。生産現場を外部に公開している工場はほとんどありませんでしたが、大原は倉敷紡績の工場の一つを研究対象とすることを認めました。1920年2月、大原と暉峻は、工場の幹部が、経営者である大原の見回りに対して前もって準備をしないように、深夜の工場を密かに訪問しました。暉峻の回想によると、工場には管理者がおらず、女子工員の三分之一が作業台で眠っていました。紡績機のスピンドルは彼女らの目の高さで回っており、眠気を我慢して働いている女工が頭をコクリと下げると、頭がスピンドルにぶつかりハッとして目が覚めるという状態でした。スピンドルの高さが女工の身長に近かったのは、紡績機がマンチェスター製でイギリスの大人の身長を基準としていたからです。これらの機械は摩擦によりものすごい騒音を出しました。また、ほこりがすべての物を覆い尽くし、視界は2メートル以下でした。大原と暉峻はこの光景にショックを受け、大原は暉峻に女工の労働条件と健康状態の改善を強く要請したといわれています。その結果、倉敷紡績万寿工場内に社会衛生の研究所の設立が実現しました。

その後、暉峻は工場長や他の倉敷紡績の幹部らと会い、どのような機器や実験施設が研究所に必要なかわかりました。暉峻は、生理学、心理学、生化学、統計学的研究を行うことができる広さを研究所がもつことを構想し、海外から機器を購入しそれを動かすための水道と電力の供給を要請しました。倉敷紡績構内で研究所設立が実現したため、暉峻は東京に行き研究員を探し始めました。彼は最初に、東京帝国大学医学部を卒業し永井教授の生理学研究室で働いていた石川知福（1891～1950）を採用しました。次に、石川の友人で当時北里研究所の研究員であった八木高次（1892～1944）を採用しました。暉峻は、後に彼が社会科学やマルクス主義から、心と身体の機能を包括的

に分析する必要性を学んだと回顧していますが、そのような認識から心理学の専門家を探すために富士川游に助言を求めまし。富士川は、東京帝国大学の卒業生の桐原葆見（1892～1968）を推薦しました⁽²⁾。彼ら4人が、後の労働科学研究所の基礎を築くこととなります。

倉敷紡績万寿工場の調査は、大原社研の社会衛生研究部門の調査として始まりまし。1920年夏、暉峻と彼の調査チームは女工の寮に住み込み、日本で最初の労働疲労の調査として彼女らの体温、脈拍、呼吸能力、血圧、聴覚反応を測定しまし。暉峻の回想によると、大原は、この調査結果が社会活動家を刺激し、社会不安を起こすことを恐れ、調査の公表を禁じたとされていまし⁽³⁾。

1920年のこの時期になると、暉峻らの調査チームは、彼らの調査分野を「労働科学」と呼んでいまし。さまざまな名称が考案されまし。医学と心理学の方法論に基づいて労働者とその生活を生理学的に調査する複雑さを捉えた用語は他にほとんど存在しませんでした。暉峻と桐原はそれぞれの著書で、学問分野としての「労働科学」の命名がイオテイコー（Josefa Ioteyko）とリー（F.S.Lee）の研究に基づいていましことを主張しまし⁽⁴⁾。大原孫三郎は「労働」と「科学」が左翼的傾向を示す用語であり、（この用語を冠した）研究所が左翼的活動を助長する可能性を懸念し、「労働科学」の使用に反対しまし。しかし、暉峻と桐原はこの用語が海外の研究でも使われていまし用語であるとして、この用語を使用することを押し通しまし。三浦豊彦によると、“*arbeitswissenschaft*”というドイツ語の用語が使われ始めたのは1925年頃で、社会衛生研究部門が自らの研究を「労働科学」と呼び始めた後のことでした⁽⁵⁾。

1920年12月に社会衛生研究部門の大原社研からの分離が正式に決定され（1921年7月に倉敷労働科学研究所として正式に発足しまし）、研究の拠点は倉敷紡績万寿工場に移りまし。倉敷労働科学研究所は、女性労働者の生理学的発達、労働者階級の女性の妊娠、女性の生理的周期と作業能力の関係、紡績労働者の尿の検査、女性労働者の貧血、女性労働者の仕事の負荷と体重の関係、などの研究を行いまし。

桐原葆見の事例

桐原が倉敷労働科学研究所の機関誌『労働科学研究』で1924年に発表した研究のタイトルは、「婦人に於ける生理的周期と作業能」でした。この研究は10章から構成されていまし、それぞれの章がさまざまな労働条件における異なった体の動きに焦点をあてていまし。研究は、綿織物工場、たばこ工場、縫製工場の女性労働者の握力と反応時間の変化の測定および詳細なアンケート調査に基づいた統計的分析を行いまし。

(2) 三浦豊彦『労働と健康の歴史』第3巻、労働科学研究所、1980年、62～63頁。暉峻はその後、青山内科の内科医である高田隣徳と生科学者の末吉治郎平も採用した。

(3) 暉峻義等「僕を語る」暉峻義等博士追憶出版刊行会『暉峻義等博士と労働科学』1967年。

(4) 桐原葆見『疲労と精神衛生』労働科学研究所（労働科学叢書）、2001年。暉峻義等「僕を語る」暉峻義等博士追憶出版刊行会『暉峻義等博士と労働科学』1967年。J. Ioteyko, *La science du travail et son organization*. F.S. Lee, *Human Machine and Industrial Efficiency*. イオテイコー（1866～1928）はブラッセル大学の生理的心理学教室の主任で、またソレベー研究所の研究員も務めた。

(5) 三浦豊彦『労働と健康の歴史』第3巻、労働科学研究所、1980年、69頁。

桐原が研究で発見したことは、現在の研究者にとってはそれほど驚くべきことではありません。統計的分析に基づき、桐原は女性が経験する生理的周期が彼女らの作業能力にも影響をおよぼすこと、作業能力が生理的周期の初期段階以前あるいはその段階に低下し、その後上昇して、周期の中間地点に最も高くなることを指摘しました。桐原によると、月経の出血開始より数日間は、ほとんどの労働者の効率が最も低下する時期です。作業能力の低下は、月経に伴う局部的痛みや不快感により引き起こされますが、影響の程度は作業の種類によっても異なります。一般化することは難しいのですが、夜間の仕事、重作業や立ち仕事の従事者の月経中の作業能力の低下の程度は、昼間の仕事、軽作業、座ったままの仕事の従事者の低下の程度より大きくなる傾向にありました。

桐原は、作業能力が月経により影響を受ける程度と、労働者の年齢や雇用期間との間に直接の相関関係はみられないと論じました。例えば、若い労働者が重作業に就く場合、その労働者の年齢ではなく労働密度の度合いが作業能力の低下の要因になるとしました。実際、重作業とそれに伴う肉体的ストレスは月経困難（dysmenorrhea）を引き起こすため、桐原は若い女性労働者と与えられた仕事の内容に注意を向けることが必要であると論じました。なぜなら、生理的周期の変化は生殖器官の疾患に結び付いている可能性があるからです。桐原は、女性がさまざまな肉体的、知的労働に就く際に、生理的周期を十分に考慮することが母体の健康にとって重要であると論じました。

桐原は、アンケートに回答した一部の労働者が月経の間に、肉体的困難や作業能力の変化はとくになかったと報告したことも指摘しました。しかし、工場の仕事を始めたことにより生理的周期にはさまざまな変化が起きています。そのため彼は、何も困難を経験していないと報告した女性労働者のなかには、生理的周期に関する身体的な変化の原因を、自らの不健康な生活習慣や全般的な体調の低下と間違えて考えたものがあるのではないかと説明しました。桐原は彼の研究を次のような提言で締めくくりました。第一の提言は、16歳未満の女性労働者は重作業を伴う仕事に就かせないことです。桐原が16歳を基準にした理由は、アンケートの分析により、初潮の時期が重作業により遅れること、および16歳の労働者の80%がすでに初潮をむかえていることがわかったことです。そのため、この種類の仕事は16歳以上の労働者にはそれほど大きな影響をおよぼさないと判断したのです。第二の提言は、月経の期間は作業負荷を軽くすること、あるいは労働を免除することです。桐原は、女性の健康の科学的管理を、将来の人口増加と国民の体力に直接影響するものとして、その必要性を強調しました。

おわりに

労働科学研究所は、その研究目的が資本主義における労働者の生産性向上・生産力増強に科学的な正当性を与えたとして、しばしば批判されました。生産性向上が労研の主要な研究テーマであることは、生産ラインに適した労働者の技能を解明するため数多くの調査を実施したことから窺われます。労研の研究への別の批判的見解は、女性の体の賃労働への適応が不十分であることを「科学的」に証明することで、女性労働者の低賃金や不安定雇用を正当化したということです。例えば、桐原の「婦人に於ける生理的周期と作業能」調査は、女性労働者を賃金などの処遇で差別する労務政策を正当化するために、引用されました。しかし、労働科学研究者が戦時下の総動員体制のもとで軍需工場の生産性向上・生産力増強への協力を求められたとき、彼らは女性労働者を保護する必

要性についても強調しました。労働科学研究者は工業化に伴う諸問題に無批判であったのではなく、生産と効率の必要性と労働者の健康への配慮のバランスについて追求したのです。

暉峻義等などによる労働科学研究が大原社会問題研究所で始まったことは、これらの研究者が社会問題を社会科学研究者とは別の視角から分析する機会を与えました。彼らは、生理学、心理学、医学の知識に基づいて、工業化に伴う弊害が表れる人間の身体を分析しました。身体は性別の問題として認識され、女性の身体は人間の生理的周期と工業労働との衝突を表しました。「婦人問題」は社会的平等や政治参加の問題だけでなく、賃労働における女性の身体の使われ方の問題も扱いました。社会科学は女性労働者の役割や地位について重要な理論的貢献を行いました。労働科学研究は女性労働者の身体を理解する分析枠組みを構築しました。労働科学研究の発展は、20世紀前半の人間の労働をジェンダー的に理解するための基礎を築き、近代日本の社会・労働政策に大きな影響をあたえました。

（なかやま・いづみ ファーマン大学歴史学部助教授）

<p>安全と健康実践ガイド 1</p> <p>すぐできる安全衛生 マネジメントシステム</p> <p>小木和孝 監修／川上剛・原邦夫・伊藤昭好 著</p> <p>A4判・284頁・2940円</p> <p>ILOガイドライン（ILOOSH2001）を原文に忠実に完訳・解説 本書独自の「二つのステップ」で、マネジメントシステムを構築できる。</p>	<p>安全と健康実践ガイド 2</p> <p>現場に役立つ騒音対策</p> <p>スウェーデン労働環境基金 原編／アメリカ合衆国労働省労働安全衛生局 編 山本剛夫 監訳／平松幸三・中桐伸五・片岡明彦 車谷典男・熊谷信一・伊藤昭好 共訳</p> <p>A5変判・126頁・1200円</p> <p>騒音による健康への影響、騒音制御に関する基礎的な原理を豊富なイラスト でわかりやすく解説。自らの手で、今すぐ騒音対策を実施することができる。</p>	<p>職場改善のための 安全衛生実践マニュアル</p> <p>青山秀康・小木和孝・天明佳臣・中桐伸五 監修</p> <p>A4判・102頁・2100円</p> <p>職場の仕事や環境を例に引きながら、安全衛生の実践活動の進め方を解説。 具体的なチェックの視点と、その改善への討議素材をつくることができる。</p> <p>人間工学チェックポイント</p> <p>—安全、健康、作業条件改善のための— 実際的で実施しやすい対策—</p> <p>国際労働事務局 ILO 編集／国際人間工学会 IEA 協力／小木和孝 訳</p> <p>A4判・300頁・1995円</p> <p>実際のなハウ・ツー対策をチェックポイントの形で128項目選んだ。 安全衛生管理者・安全保健担当者向けの、実践的な改善手引き書。</p>
<p>財団法人 労働科学研究所出版部</p> <p>〒216-8501 神奈川県川崎市宮前区菅生2-8-14 TEL 044-977-2125 FAX 044-976-8190</p> <p>E-mail: shuppan@isl.or.jp URL: http://www.isl.or.jp/ (価格は税込)</p>		